



運用管理に必要な「鳥の目、虫の目」

年金基金の運用管理では、「①長期運用基本方針に基づき、政策アセットミックスを決定、②マネジャー・ストラクチャーを決定し、相応しい運用機関を選択、③各運用機関毎に運用ガイドラインを提示し、定期的なモニタリング（パフォーマンス評価）を実施」といった一連のプロセスが必要である。

言わば、「鳥の目」で、運用プロセス全体をコントロールする一方、「虫の目」で、個々の細かな各プロセスをチェックする役割が、年金基金の管理者に求められているのである。

ところが、現実には、目先のパフォーマンスに基づく、運用機関の選択・評価にとらわれて、長期運用基本方針に合致しない運用も、一部にみられがちという。こうした落とし穴にはまらないように、年金基金の管理者は、「虫の目」も大切であるが、とりわけ、全体をコントロールするための「鳥の目」を忘れてはならないだろう。

《目次》

- ・ 年金制度：米国のマスタートラスト制度（2）
- ・ 年金運用：年金資産運用と金融工学
- ・ 年金運用：為替ヘッジ戦略について（上）